

壺井栄論(19) — 第八章 敗戦の混迷の中で (前篇) —

A Study of TSUBOI Sakae (19): Her Agony During the Postwar Years (I)

鷺 只雄

SAGI Tadao

一

占領軍による 昭和二十年(一九四五)八月十五日、日本は無
検閲の復活 条件降伏・ポツダム宣言受諾を発表し、これに
よって第二次世界大戦は終結した。日本の軍人・一般国民の戦没者
は三百万人に達すると推定され、その被害ははかりしれない程大き
いものであった。

敗戦による改革・解放はそれまで特高の監視下にあった壺井家
にとっては待ちに待った新しい歴史の到来であったが、この時点で満
四十六歳(繁治は同四十七歳)の栄にとっては新時代の到来とは言っ
ても、手ばなしで楽観できるものとは思えず、はしゃぐような気分
にはなれなかった。

従ってこの時期、栄が何をどのように考えていたかについてはつ

まびらかにすることは難しい。ただし、栄の占領軍に対するこうし
た直感、漠然とした警戒感も間もなく現実のものとなって現われる。
昭和二十(一九四五)年九月一日から占領軍GHQの民間検閲局C
CDは活動を開始し、新聞・出版・放送・映画・演劇から紙芝居に
いたるマス・メディアと、郵便・電話・電信などのパーソナルメイ
アに対する検閲が始まる¹。繁治を始めとする共産党系の人物への書
簡検閲がまずあげられる。

占領軍による壺井家に対する書簡検閲は現在同家に残されている
書簡に関する限り繁治に対するものが殆どで、栄については一通の
みである。

検閲書簡(封書の下部を開封して検閲、検閲済印を押したセロハ
ンテープで再封印してある)は全十九通。次の通りである。

昭和20・9・23	大島博光	↓繁治宛
昭和21・2・6	松山福太郎	↓同右
昭和21・2・7	江口 渙	↓同右
昭和21・3・16	松山福太郎	↓同右
昭和21・4・2	松山福太郎	↓同右
昭和21・5・1	松山福太郎	↓同右
昭和21・7・8	吉塚勤治	↓同右
昭和21・7・20	坂井徳三	↓同右
昭和21・8・13	広沢一雄	↓同右
昭和21・12・17	広沢一雄	↓同右
昭和22・1・26	近藤 東	↓同右
昭和22・5・8	九州評論社	↓同右
昭和22・5・10	吉塚勤治	↓同右
昭和22・6・10	大島博光	↓同右
昭和22・6・11	井上光晴	↓同右
昭和22・8・13	伊藤 和	↓同右
昭和22・?・9	九州評論社	↓同右
昭和22・10・17	中村正作	↓同右
昭和24・6・30	貴田きみ子・より	↓栄宛

対日平和条約の調印されたのが昭和二十六（一九五二）年九月八日で、翌年四月二十八日には発効し、占領軍による検閲制度がなくなった。前述したように、右の検閲書簡は現在壺井家に残されているもので、これ以外にも検閲されたものがあつたであろうことは容易に想像されるが、その詳細は不明である。

現在残されているものについて言えば殆どが私的・個人的な私信であり―近況報告や詩に関するものや出版依頼や娘の縁談依頼などであつて、新生日本建設に向けての政治的・社会的な提言などは含まれていない。

従つて、該当する栄の一通の場合も内容は姉と姪からの見舞品に対する礼状と近況報告であつて、検閲した方が拍子抜けするようなものであつたと見られる。

「石臼の歌」の 次には指摘されるのは出版の検閲である。従来この削除と改稿の 方面の調査や研究は遅れている。

理由は検閲の過程は無論、検閲を通らない事由が一切明らかにならず、問い合わせも異議申し立ても許されていないという状態であつたからである。更に念が入つていたのは、検閲が存在することを示すこと自体が検閲の対象であり、紙・紙面に伏字や空白、頁の脱落等、検閲による削除の痕跡を残すことも許されなかつたという悪条件も加わつていたことをあわせて考慮すべきであろう。こういう状況では実証的に検閲の実態についての研究を推し進めることは極めて困難だからである。

それが近年に至つて思わぬところから当時の検閲資料が発見され、公開されることになつた。いわゆるプランゲ文庫がこれである。

プランゲ文庫は当時GHQの歴史部長だつたゴードン・プランゲ博士が、占領期に検閲用に提出された雑誌・新聞・図書などの資料のうち、占領終了後に廃棄を免れたものをアメリカに持ち帰り、メリーランド大学に寄贈した。これが近年に至つて同大学と国会図書

館が協力してマイクロ化事業を行い、推定頁数六百十萬のマイクロフィッシュが国会図書館で公開されることになり、占領期において検閲の強制によって半ば化石化されていた雑誌や作品が蘇生することになった。

また、占領期雑誌記事情報データベース化プロジェクト委員会（代表・山本武利）によって、このプランゲ文庫コレクションの全雑誌、目次等から著者名、タイトル名、小見出し、検閲に関する情報、発行年月日、等の情報が入力されて、Web上で公開されているので次々に新しい情報を入力することができるようになり、今後の活用に期待したい。

さて、栄の児童文学作品「石臼の歌」（昭20・9・1〔8月―9月合併号〕「少女倶楽部」）は小学校の教科書に教材として採用され、しかも原爆の悲劇をとりあげた作品としては最も早い時期に属するものの一つとして高く評価されている作品であるが、最近この作品について新しい事実が明らかになった。それはこの作品がGHQの検閲によって削除と改稿を余儀なくされた結果発表されたものであるという新事実である。（猶、この事実に関しては既に拙稿で述べたので詳細はそちらを参照願うこととしてここでは事実のみを簡潔に述べておきたい）。

「石臼の歌」に対するこのGHQの検閲による〈削除と改稿〉の命令と言う事実は従来全く知られていない事実であったが（前述したように検閲の存在自体を秘匿するGHQの方針の反映と思われるが、栄はこの件に関し、一言も発言していない）、それには初出雑誌への発表時期と検閲開始時期の狭間という微妙な時間のズレの問題も重なっていたと見られる。

「石臼の歌」は「少女倶楽部」の「8月―9月合併号」で昭和20年9月1日の発行になるが、GHQの検閲活動の開始が丁度同日からというように、タイム・ラグが発生し（それは栄の原子爆弾への関心の深さと作家的良心の触覚の鋭敏さを証明するものであろう）、そのために連合軍の占領下においては「原子爆弾」に関する記述は一切タブーであったにもかかわらず、許されない筈の表現がスルリと抜けてしまったという事情があったものと考えられる。

ところで問題はそのあとに起る。初出発表時には僥倖にも未だGHQの支配体制が未整備であったからいわばフリーパスに近い状態であったと見られるが、一旦体制が整備されると締め付けは厳しく、殊に原爆関係には厳しかった。

そのため、「石臼の歌」を含む童話集『十五夜の月』（昭22・7・10 愛育社）を出版する話が起った時は、原爆関係の記述が削除乃至改稿されるのは当然と言う雰囲気であったと推定される。そこで手直したゲラをGHQに提出すると、「原爆に関する部分は『delete（削除）』と、書き込まれ、削除部分に替えて瑞枝等が楽しく過ごす部分が書き加えられた」。改稿された作品には「原爆」もそれを連想させる記述も一切なくなっていた。

そしてこのゲラはGHQ参謀II部で歴史部長を務めたアメリカ、メリーランド大学のゴードン・プランゲ博士が持ち帰った約八十万点のプランゲ文庫の中にあつたのを、北星学園女子短大の谷暎子教授が発見したことによって明らかになったという経緯がある。付言すれば、プランゲ文庫のコレクションはその特殊な性格から今日では既に散佚してしまった戦後日本の昭和二十年代前半の資料の宝庫として珍重されるという歴史の皮肉なめぐりあわせにもなっ

ている。

朝日新聞社からの教示⁷によれば、平成14(02)年8月8日時点で検索可能になった資料の同社による調査結果によれば栄の小説は四点―「白いリボン」「真垣夫人」「そぶつ」「五厘のパン」、随筆が一点―「桃と柳のひなまつり」あるとの事であるが、私は「五厘のパン」を除いては調査して既知のものであり、小生編集の文泉堂版の新全集にはいずれも収録してある(随筆の「桃と柳のひなまつり」を未収録したのは、第一に紙数の制約、第二にその内容・風習が栄作品にしばしば登場して周知のことであるからにほかならない)。

新出の「五厘のパン」(昭21・10・10「カロリー」9月―10月合併号)は発行所が東京神田淡路町にあった食料文化研究所で、この号は一卷四号。「五厘のパン」は戦後の飢餓の中で小学生の語る夢が、「人間の身体よりも大きなパンが五厘」という窮迫した世相を写している。

窮乏生活

敗戦は衣食住全ての面において国民に窮迫を強いた。その一端を示すと、九月十日には宮本百合子が疎開していた福島県の郡山市から上京して久しぶりに再会し、十二日には早朝に顕治の実家である山口へ向けて発つのに焼きお握りを持たせる。

九月二十九日には甥夫婦の死によって孤児となった一歳の岩井右文の養育を託され、引きとるが、食料逼迫の折からと栄の体調の悪さから果たして無事に成人させられるかどうか不安であった。

十月頃には小豆島出身の東京芸術大学の学生横塚繁を食事なしの条件で同居させる。この頃の東京は焼野原で、四畳半一間に一家四、

五人で暮らすというのも珍しいことではなく、この場合も同郷のよしみでと無理に頼まれて置いた¹⁰もので、約一年程いたが、後に画家となり、栄の新聞連載小説「あす咲く花」の挿絵なども画いた。

十一月に、「中央公論」からのルポルタージュの依頼で、池袋、熊谷(一泊)、上野、新橋と廻って、戦後の東京とその周辺の飢餓状況を視る機会があった。しかし、そのレポート「飢餓の街」(46・1「中央公論」)ははつきり言ってこれでは羊頭狗肉と言われてもしかたがない。

第一に、自分の足で繁華街を歩き、自分の目でみた所が余りに少なすぎる。池袋は駅のホームでの一時間の見聞であり、熊谷については一泊したにもかかわらず記述がなく、上野までの車内での見聞にすぎず、上野は駅頭とお山を歩いてまずまずだが、新橋に至っては逃げ腰でのおっかなびっくりの、はれものにさわる式の見物で、とても「見た」と言えるしろものではない。

率直に言ってこれでは高見の見物をしているお上品な奥様の見物記というほかはない。生きるか、死ぬか、飢餓線上に生きている人々のすさまじい争闘を読者の脳裡につきつけるというふうにはなっていない。それにはルポになれているとか、いないとかいう問題ではなくて、何よりも第一に対象に体当たりで入って行く気構えが欠如している所に最大の問題があると言つてよい。文中で、夫の繁治が借地して四アール程の薩摩芋畑をつくり、375キロ程の収穫を予想するが、芋泥棒にあつて実際には百キロ程しかとれなかったというが、こちらのエピソードの方がはるかにリアリティがある。

十二月初旬、NHKのラジオ放送に出演して、その出演料の余りの安さに憤慨して「あてがい扶持」(46・1「月刊読売」)を書いて

糾弾する。(たまたま高見順「敗戦日記」を読んでいたら、こちらは二〇年三月八日の項に同様の憤慨を記している部分があったので引用しておく。「文芸春秋社に行く(中略)『馬上候』の稿料を貰う。百八十円。一枚六円だ。一パイやると百円は消えるこの時世に、一枚六円―以前と変わらぬ稿料だ。それから税金が差し引かれる。)後述するように、毎日新聞からはすぐに反応があつて溜飲を下げるが、肝心のNHKは沈黙・無視を続けるのみで、それは二十一世紀の今に至るも基本的には変っていない。

冬、飼っていた鶏が大きな卵を生んだ晩に犬に襲われて殺されてしまう。¹¹この鶏は敗戦直後に、熊谷の妹の所からもらったもので、小屋は日当たりもよくない所で、餌も思うにまかせなかつたせいか、とぎれがちに卵を生んでいたが冬になるとバツタリ生まなくなり、その日は久しぶりに大きな卵を生んで一家を喜ばせたのだが、その晩に犬にとられてしまったのだ。そのショックで残された大きな卵は食べる気になれず、また鶏を飼うことをすすめられたが、あの鶏が心を去らず飼う気になれなかつたという。

二

「あてがい扶持」と 昭和二十一年(一九四六)一月に、毎日新聞初の新聞連載小説 聞社が発行している「少国民新聞」(のち、昭和22年5月1日から「毎日小学生新聞」と改題)編集部の井上まつ子が来訪、同紙に児童向けの長篇連載小説の依頼を受け、承諾する。「海べの村の子供たち」¹²と題して三月一日から七月二十日まで掲載された初の新聞連載小説である。

前項で一寸ふれたように、NHKの口演料(事前に放送用の原稿を十枚提出しているから原稿料といつてもよい)の余りに安いことに驚き、「私の最低の原稿料よりもまだ安いのである」¹³ことに憤慨して栄がNHKを糾弾した一文をこの月発表したことについては記したが、連載の依頼に来た井上まつ子がいきなりあれを読んだと言い、一枚二十円ではどうか、とのつけから原稿料の話を切り出されたのには栄も驚く。しかし、「当時のわたしにとって二十円はとびきりだったのでいまでもよくおぼえている。しかしそれよりうれしかったのは、私の作品が新聞にはじめて連載されるということのほうであった。まだなれないわたしは、わたしの能力を総動員して書いた。たしかまだ進駐軍の検閲があつたと思う。その枠内で書かねばならないから、なんとなくきゅうくつなものも感じながら、わたしなりの戦争への批判も書いたつもりである」¹⁴。

文中、「進駐軍」というのは、敗戦後に日本を占領した連合軍のことであり、その「検閲の範囲内」で書くというのは、プランゲ文庫の項でもふれたように書く対象と表現に制約があつたことをさしている。

この作品については後に改稿(改作)改題して「母のない子と子のない母」¹⁵に改めている事実が示すように、作者の言によれば「不満だらけの作品」¹⁵ということになり、改稿される。しかもそういう作品が栄の場合珍しくない。

例えば、「海のたましい」↓「柿の木のある家」 「孤児ミギー」 ↓「右文覚え書」 「童話のある風景」 ↓「りんごの袋」 といったぐあいにこれが非常に多い。

しかも従来は単に「……」の改稿(改作)として殆ど何の吟味や

分析もなしに、すませられてきてしまっているために、そこには何の問題も存在しない、少なくともそこに何らかの問題を指摘して論じたものがなかったことは確かである。

しかし果たしてそれでよいのかどうか、そこにはどういう問題があるのか―改稿（改作）の含む問題についての検討も必要であり、重要であることを提言して、実際に拙稿¹⁶で検討してみたことがある。その結果判明した結論のみを示せば「海のたましい」と「柿の木のある家」とは全く別の作品であり、単純にこれを「改稿（改作）」と呼ぶのは誤解を招くゆえに使用をやめるべきであり、当然そのことは作品の主題、作品の性格、児童文学か否か、等という問題にもかかわってゆくわけで、慎重に検討を要する課題であることが確認された。従ってここでもそのことを念頭におきながら分析を進めることにしたい。

子供の物語 この作品の特徴を一言で言えば、小豆島の子供たちの生活を四季の変化の中に描いたものと言うことができる。

視点は子供の視点から（部分的にほんの少しだがそうでない部分も交じっているが、まず子供の目からみたと行ってよい）描かれた小豆島の子供達の冬から夏（二月から七月頃まで）にかけての遊びと暮しの物語―その上にぜひ牧歌的な冠したい―その点で、この作品は子供による、子供のための物語と断じてよい。

特徴の第二は、作品の冒頭で作者は、ここには祖父母・両親・作者の少女時代の回想を今日の子供達の動きの中に織り込んで話してみたい、としているが、昔の話は全体の二割から三割程度であつてほぼ現代の話が主になっていると言つてよい。特に回顧的な姿勢、

あるいは話柄は二章の「昔の話」までが露骨であるが、それ以後はとけこませてあると言つてよいであろう。

次に目につくのは、子供も労働と共にある生活である。麦のあいうちや、麦刈り、麦束運びなどの畑仕事を子供達が手伝うのは当然としている生活がそこにはある。その中で子供達は働く喜び、労働して汗を流す心地よさを身をもって体験する、栄文学の基本の生活がそこにはある。

第四に田舎と都会、あるいは島と関東平野を対比させて、相互にその存在を認識させ、驚きや感嘆から敬意を持つて相互に接触、交流させる手腕は凡手ではない。

史郎が言わば小豆島Ⅱ田舎を代表し、それに対して一郎は熊谷Ⅱ関東平野Ⅱ都会の代表として対比され、そこに生まれる軋轢を不毛な対立とはではなく、相互に未知の世界を知るきっかけとして交流を深めることが企図されている。

そしておしげおばさんは、一郎の保護者格であり、〈史郎的世界〉と〈一郎的世界〉の仲介者、あるいは調停者の役割を果たすべきなのであるが、作中では中途半端な脇役に終始しているよう、配役上のミスがあるといわざるを得ない。

最後に戦後の現実として、父の未帰還、夫や父の行方不明や戦死、物不足から、戦争反対の声が静かに浮かびあがってくるしかけになつていて、決して声高に、至る所でわめくわけではない。

二つの作品 それでは次に改稿・改作によって作品がどのよう
に変わったかについて明らかにしておきたい。
の違い

先ず、枚数から言うと『海べの村の子供たち』が約三百四十枚
(四〇〇字詰)であるのに対して、『母のない子と子のない母と』は
約四百十枚で、約七十枚ほど分量が多くなっている。

第二に、『海べの村の子供たち』は子供を中心に、子供の世界を
描いたものであるのに対して、『母のない子と子のない母と』では
これが大きく変化して、中心が一つの円であったのが、中心が二つ
の楕円に変っている。即ち、『海べの村の子供たち』では、作品が
子供の世界が中心で、おしげ(改作ではおとら)おばさんは単なる
脇役に過ぎなかったのに対して、『母のない子と子のない母と』で
は子供の世界に加えてもう一つ大人の世界が加えられ、改作前には
脇役であったおとらおばさんが一人息子と夫とを戦争でなくしたも
うひとりの主役としてしっかりと書き込まれて重要な役割を果たして
いる。

第三に、物語世界の変貌ということがある。『海べの村の子供た
ち』は小豆島の伝統的な暮しや風習の中に生きる彼らを四季の変化
の中に牧歌的に描いたものであるのに対して、『母のない子と子の
ない母と』では戦争の悲劇が前面に押し出されている。前者ではそ
れが作品の一部であり、部分的であったのに対して、後者では特に
おとら小母さんと捨男一家の設定と描写において(戦争は不幸しか
もたらさない)とするメッセージが至る所で強く全面に打ち出され、
問題提起的作品に変貌してしまっていると見られる。

〈反戦平和の希求〉という思想は、この作の発表当時、朝鮮戦争
や日本の再軍備への始動という動きの中で、栄にとつては押えよう
もない思いではあったであろうが、率直に言って客観的に見てベタ
塗りの観があるのは否定できないのではないであろうか。

というのはこの作品の生命はそういう問題提起的などころにある
のではない。土地の風習の中に生きる子供の遊びの土着性、地域に
住むおばさんの、ゴミが目に入った子供への親身な手当てや、おじ
いさんの役割―栄の作品では通常はおばあさんがこの役を勤めるの
だが、これはその意味では異例と言ってもよく、史郎を仕込み、み
かん山では子供たちに善意をきちんと教え、また麦刈りの指導をす
る等、しかも冗談を交えながら、子供たちにすんなりと受け入れさ
せるようにはからう点でおじいさんがしつけ役として重要な役目を
果たしている等のところに見られると思われからである。

四

昭和二十一(一九四六)年一月二十六日(土)に、戦時中、中国
に逃れていた野坂参三が一月十二日に帰国したのを祝って東京日比
谷公園の野外音楽堂で開かれた野坂参三帰国歓迎大会に出席し、沢
山のなつかしい昔の顔に再会し、新時代の到来を実感すると共に、
新たな活躍を願う¹⁷⁾。

三月から四月にかけて、第一回総選挙(四月十日に衆議院議員選
挙実施)があり、立候補している共産党の候補のために夫婦で四国
に応援に行き、小豆島にも寄って疎開してあった衣類を、重いので
散々苦労しながら持ち帰る。チッキ(JR乗車時に駅で手続きすれ

ば荷物を下車駅まで運んでくれる制度があった)にすれば苦労はない筈だが、当時は戦後の混乱期でチッキの荷物が着かないというのが当たり前という状況であったため、帰宅するまでに殺人的な混雑の列車を九度乗り換えても重い荷物を手に持って帰らざるをえなかった。¹⁸

夏、雉が隣家との境の繁みに巣をつくり、庭の畑を親子五、六羽で餌をついばみながら歩く牧歌的な風景を楽しむことができた。¹⁹

八月十二日、妹シンが徳永直の後妻になる話がまとまり、同月末結婚するが、ソリが合わず、出る入るのトラブルがあつて心痛するが、結局二ヵ月後に離婚する。この事件が栄の心身に与えた影響は大きく、疲労甚だしく、創作は大儀となり、十歳も老けたようになり、「このあと三年間療養」(自筆年譜)と記すなど困憊した。とりわけ徳永直への不満は消し難く、その思いが後に「妻の座」(47・7、49・2、4、7「新日本文学」)を書かせる発条となる。

身边小説 昭和二十一年の一年間に発表した小説についてこれまでにふれたものは除いて概説しておく、まず「ミネもの」とでも呼ぶべき、栄自身を語り手、あるいは主人公とした身边小説から書き始めていることが特徴の第一にあげられよう。

「朝のかげ」(46・1「東北文学」)は新居の地境にあつた榎が見事な大樹になつて緑陰と涼風を与えてくれるが、戦時中焚き物に困り、一旦は切ることにするが惜しくなつて途中で止めるに至る顛末を記し、「地下足袋」(46・2「民衆の旗」)は三題話風に、ミネの家に赤ん坊の右文・下宿生の小山田少年・共産党員の水野が敗戦で

出獄してきた経緯を語り、「表札」(46・3「思潮」)では谷本謙一(小田切秀雄によれば蔵原惟人だ²¹)が敗戦直後にミネの家を訪問して以来、旧友達が訪ねて来て「永い冬眠からさめた蛙のように活気」づいて新時代の到来を喜ぶ心を、堂々と表札をかけられる所に象徴させている。

「人生勉強」(46・5「モダン日本」)は栄の娘時代の回想で、キリスト教の日曜学校の若い女性伝道師斉藤先生の思い出を綴つたもの、「誕生日」(46・5・5「心窓」)は家族ぐるみの交際であつた榎田緑の結婚式に際して、初めて会つた時の印象からやがて意中人(伊達康一)と結婚するまでの八年間を記した新しい門出への讃歌である。なお、この作品は未発表で、文泉堂版全集収録により初めて活字にされたもので若干補足しておく、緑の兄、榎田克巳(一九二一〜八五)たちの回覧雑誌「心窓」(46・5・5作成)に寄稿され、回覧されたもので、20×20久楽堂製の原稿用紙三枚半に書かれており、榎田家蔵。榎田は経済学者民蔵の子で、朝日新聞社に勤め、大仏次郎「天皇の世紀」などを担当。早稲田大学の学生時代に友人と回覧雑誌をしていた時に寄稿されたもの。母は戦後婦人運動家として著名なふきで、戦前はふきが「青年女子版」の編集記者をしていたところから知り合い同居がすぐ近くでもあつたので壺井家とは家族ぐるみの親交があつた。克巳の編著には「榎田民蔵全集」全六巻がある。緑はその妹。この一家をモデル、あるいはパン種としてこの前後にいくつもの作品を書いている。

右文もの―― 第二の特徴としてあげるべきはいわゆる「右文戦争の悲劇」ものゝの連作執筆であろう。一章でも一寸ふれ

たように栄には夭折した亡兄弥三郎の遺児、典つよしと卓たかしを幼時に二年間引き取って育てた縁があり、この二人の甥には格別の思いがあった。長じて典は広島で建築士となり、卓は上京してジャーナリストとなつて再び叔母甥の關係が復活する。順子と結婚した卓は単身中国へ赴任し、昭和十九年九月に右文が生まれ、翌年春に右文の顔を見る事なく病死し、そのあとを追うように順子も二十年九月に腸チフスで死に、その遺言で孤児となつた一歳の右文が栄の所へ来た。真澄に次いで二人目の養子（入籍は二人とも51年5月27日）である。

この時栄の健康状態は更年期症状もあつて最悪な上に、一千万人の餓死者が出るだろうと推計される食糧事情があり、米や牛乳は手に入りにくく、仮に手に入つても極度のインフレで途方もない金を請求され、いわゆる竹の子生活を余儀なくされていた。従つて栄にとつてはまず自身がこの戦後の混乱を生きのびられるかどうかさえ危ぶまれる状態であつたのである。戦争の悲劇は戦後を生きる人々の上に重くのしかかつていた。

その第一作が「一つ身の着物」(45・12「平凡」)で、右文を引き取るに至つた顛末を記すが、読後の印象としては率直に言つて右文の母方から半ば強制的に有無を言わさず押し付けられた事への違和感が強くあり、愛情がわかないままにひきとつてきた事への不満、「三分の迷惑と七分の義理」が明記されていることが一つ。もう一つは二十三歳になつた正子が恩返しにと積極的に育児を買つて出てくれているのを助けてあげてにすれば乗り切れるかもしれないと心積りしていることがうかがえる。第二作が「戦争のくれた赤ん坊」(46・2「婦人倶楽部」)で末尾には作者の附記があつてこれは「小説ではなく(中略)事実」であり、「両親に代わつて残しておいて

やりたい記録の一部」であると記されていて、栄に「記録」として残す意識がこの時点で明瞭となつたようである。両親の言行、母の死の前後、ひきとつた経緯などが具体的に記されている。「若い乳房」(46・2「女性線」)は右文をひきとる前後の鈴子(真澄)の思い——幼時の回想と「母さんにもしものことがあれば、右ちゃんは私が育てるわ」——を彼女の視点から描き、「地下足袋」(41・2「民衆の旗」)では全三章のうち、一章を右文の来た由来について記す。「ベアちゃん」(46・3「フレンド」)は三千子の家に道郎(右文)のこと。順子姉ちゃんの遺児がひきとられて新しい生活がはじまる様子を描いている。

これらの作品には、若い父親が、「文学を志し」(「戦争がくれた赤ん坊」)ながら「戦争のために、彼の志が通用しない」(同上)故に中国大陸へ赴き、まだ見ぬ子のために「右文という名をおくつてよこしたことに、彼の心もちが現われていた。——右文とは文学を尊ぶこと。かつて文学を志した親父の意志である。——彼は妻への手紙にそうかいて「よこした事が示すように、おのれの志とは違つて空しく命を落とさねばならなかつた無念の思いが繰り返して語り、また戦後にまで生きのびながら、栄養失調の身にはひとたまりもなかつた病事故に立ち上がれなかつた若い母親の無念の死を描いて哀切である。その結果無数の右文たち——孤児が生まれたわけで、かかる戦争の悲劇をまっすぐに見つめて書き続ける作者の怒りは強く激しい。

新社会への 次次に指摘したいのは、敗戦後の目標やモラルははっきりとは提示できないながら、若い男女が従来の
胎動

青年団を嫩草会と改めて、積極的に忘年会、カルタ会、駅前道路補修、講演会と、新時代に生きる若者たちの手さぐりの青春を二十歳の娘の日記のスタイルで描いたのが「嫩草日記」(46・3「婦人春秋」)。

「めがねと手袋」(46・5「革新」というタイトルの意味は父亡き跡の十年間を母一人で働いて兄妹をそれぞれ大学と女学校にやり、戦後は新聞の隅々にまで目を通し、新しい社会に進んで身を投じる母に、感謝の心を込めて誕生日に兄は老眼鏡を、妹は手編みの手袋をプレゼントする所からつけられたもの。

新社会建設をめざす兄妹とその母という戦後の、明るく開放的な雰囲気を反映し、男女とも、のみならず母も新しい社会をつくり生きようとの姿勢を提示するが、このモデルは前述の櫛田ふき一家のそれにほぼ重なっている。

こういう歴史の転換期にあたって、民主日本という新社会建設へのシュプレヒコールを叫んだのが「こだま―尾崎氏に寄す―」(46・5「月刊読売」)「尾崎」とは尾崎行雄をさす)であろう。これは「月刊読売」(46年5月号)のグラビア特集「尾崎さん元気でいて下さい」に寄せられた栄の詩で、極めて珍しく活字になったものとしては現存する最古の詩であり、単行本は勿論、全集にも未収録である。憲法草案も出て、新日本建設をめざす中、「ああ民主戦線結成のその叫び／あなたは国の宝 救国の星」として、〈憲政の神様〉尾崎罌堂(一八五九―一九五四)への讃歌である。以下に全文を引用する(新字・新仮名に改めた)。

こだま―尾崎氏に寄す―

壺井栄

かつての日 あなたは「墓標に代えて」烈々の言葉を吐かれた／しかしあなたの声は砲弾にうち消され／その硝煙の中であなたの墓標は火あぶりの刑に処せられた／馬車馬のようにむち打たれて盲目にされた人民は／今昏迷の十字路に立つて敗戦の現実²³に立ち向かい身をかたむけている／この時あなたの声はさまざま雑音の中から次第にはっきりと聞こえてくる／人々はあなたの声に耳をかたむけあなたの声につづいて叫ぼうとする／ああ民主戦線結成のその叫び／あなたは国の宝 救国の星／あなたの叫びはこだまして人々の胸にひびく／あなたの齢は百年の歴史を重ねつつ その声は千年の真理に通ず／新たに生まれんとする民主日本と共にすすむあなたの声／あなたの声はとこしえに若く 人々の心から心へとこだまする／暁の明星の如きその声

戦争の傷痕

戦争はさまざま不幸や悲劇をもたらす。それを小民・細民・庶民レベルの生活面での反映として映し出すのが栄の小説と言ってもよいわけであるが、第四にそういう戦争の傷痕を描いたものがある。「ふたたび」(初出未詳)は恋人が戦死して一夜妻となつてしまった娘と周囲の出征者は続々復員しているのに、中々帰つてこない息子を待つ母の心中を描き、「真垣婦人」(46・8―9月合併号「食と生活」)は夫のプレゼント癖を浪費と思っていたが急死して初めて愛情と気付く過程を、戦後のタケノコ生活の中

に辿り、「五厘のパン」(46・9—10月合併号「カロリー」)は飢餓に苦しむ余り雪割草を食べて気狂いになった人もあると聞くが、小三位の子供が「人間のからだよりもっと大きなパンが五厘なんだよ」と語りながら行くのが耳に入るきびしい現実を描いている。

「秋蒔きの種」(46・10「女性ライフ」)は従来単行本・全集に未収の作品で、「妻の座」の前身となる〈閑子もの〉の第一作である。郷里の小豆島に教師をしながら先祖まつりをしているうちに婚期を逸してしまった妹の閑子の将来を案じていた「私」は恩給つくまであと一年の所で辞めてしまったと聞き、東京へ呼び寄せ、夫ともども永いつきあいの労働者出身の作家野村が妻を亡くし、四人の子をかかえて往生し、「裁縫の出来るやさしい女」を「ただ一つの条件」として妻を求めているのに縁付けようと閑子にはなすまでを記す。これについてはのちに「妻の座」で詳しく述べるが、一言だけ指摘しておけば、閑子は裁縫の教師であったというだけで野村の求める「裁縫の出来るやさしい女」となり、「第二の夫人」となりうると考えるのは、余りにも割れなべにとじぶた式の、形式主義、こちら本位のご都合主義というべきではないであろうか。

「小さな物語」 昭和二十一(一九四六)年のしめくくりに、児童文学の秀作を紹介して終わりにしたい。

「花まつり」(46・5「幼年クラブ」)は四月八日にはセツ子の村では花まつりで山つつじで花飾りをし、お寺に行くと言茶をたつぷり堪能できる楽しい日であることを語り、「にわたりのとけい」(46・10「フタバ」)はおじさんがつれてきてくれたにわたりが毎朝ときをつくるのをきいて、まさこがとりはとけいをのどのところにかく

しているというもので、いずれもファンタジックな小品であるが、「小さな物語」(46・7「少女の友」)はその彫りの深さにおいてあたかもギリシャ悲劇を読むような感動を与える傑作である。物語は十一歳の多市と八歳のキクが、既に母はなく、父は病身故に妹は祖母の許へ行き子守となって生き別れとなり、間もなく祖母も父も死亡—十年経って多市がキクを迎えにきてもどるまでの、兄妹の別れと再会を描いたものだが、一切の感情を排して、物語の展開を即物的に叙述して、センチメンタリズムに墮するところがない。従って読後の印象は深く、重い。栄の児童文学作品の中で屈指の名作であろう。

五

〈克子もの〉 既に見られて明らかなように、昭和二十(一九四一)とその周辺 四五)年から二十四(一九四九)年位までは、栄の活躍する主舞台は児童文学の方にあったと見てよい。そういう戦後の動向を決定したものは、戦時中からの傾向がそういう方向にあったからとみてよいであろう。

無論、栄本人にはそうした状況におかれることへの屈辱、不満は蓄積されていて、いつかそれを打ち破って曾てのように文壇で、小説の世界で存分に活躍したいと念願し、その為の準備もしていた。それが漸く実を結んで戦後の文学界に壺井栄の復活を告げたのが「屋根裏の記録」(50・1「中央公論文芸特集」)であったとみて間違いないであろう。

従って栄の戦後の復活は昭和二十五(一九五〇)年からと見るの

が妥当なところであろう。

この章では昭和二十二（一九四七）年の児童文学からみてゆきたい。

「お年玉（A―児童・克子もの）」（47・1「こども朝日」）はデビュー作「大根の葉」以来の例の目に障害のある〈克子もの〉の一つで、今は十三歳に成長し、今年の四月からは盲学校に行かせようかと話しているところへ、東京の伯母さんからお年玉にピアノを贈ってくれるという手紙が来て母子で大喜びの姿を描き、「大きくなつたら」（47・7「子供の広場」）も同じく〈克子もの〉で小五のかつ子はピアノリストになりたい夢をもっている、母は盲学校へ行かせながら、あんまはいやがるのでピアノを習わせようと思ういきさつを―人生選択の岐路にさしかかった姿を描く。

「お年玉（B―児童・大ちゃんもの）」（47・1・2「婦人民主新聞」）はみかんの大好きな七歳の大ちゃんの夢を描き、「朝の歌」（47・1「フレンド」）は幼少時に生家にあつた八角の柱時計にまつわる思い出を豊かに語った佳作であり、「あばらやの星」（47・3「銀河」）は「まつりご」の変奏で、みなしごのコマツとサンゾウの姉弟（七歳と五歳）が食を乞うて時に犬のあつかいも受けることのあるのを見かねて工場労働者のおじさんが二人を引取って育て、人間の尊厳を教える秀作。「白いおくりもの」（47・7「少女クラブ」）はアメリカ、シアトルに住むおじさんから文子の家に、敗戦後の苦境見舞いに洋服やマントや色々な見舞が届く中、特に文子の母は人間は塩なしでは生きられないからありがたいと泣いて喜ぶ。栄の夫の繁治にはアメリカに渡り、シアトルで帰化して雑貨商を営む兄の嘉吉がおり、日米を往来して栄一家とは親交があり、栄の作品にも

しばしば登場する。「あんずの花の咲くころ」（47・8「少国民世界」）は東京のひろ子とたかしの家になかのおばあさんから、今盛りのおんずの花を見せたい、夏みかんやおもちを食べさせたいからおいでという手紙が来るが、当時の状況では無理。列車は殺人的な混雑ぶりであり、送るにしてもつかないし、ついても余りに時間がかかりすぎて腐ってしまう（二度もそういう目にあっている）―ひろ子はいずれあんずのうれる頃に参りますと手紙を書くというもので、戦後の混乱した世相を反映した作品の一つ。

この年連載された「童話のある風景」（47・12・11―48・7・15「婦人民主新聞」）は22回連載したところで作者の病気のため未完中絶となり、のち全面的に改稿・改題して「リンゴの袋」として『柿の木のある家』（49・4・20 山の木書店）に収録。のち、『壺井栄作品集2 柿の木のある家』（56・9・5 筑摩書房）に収録後、タイトルの表記を「リンゴの袋」に改めた。

作品の概要を記すと、東京に近い都市に住む夫婦と三人の子―純（中一）、シズ（小五位、初出では志津）、健介（六歳、初出では直樹）を中心とした話で、次々に話題が変わってゆく。まず母の腕時計が売られて正月の餅にかわり、迷信かつぎの田舎のおばちゃんが来て健介がカゼを引いたのは神の使いのミミズにおシッコをかけたからとそれを探して洗い清めてお祈りし、健介と喧嘩して出てゆく。母はりんごの袋はりの内職をして家計を助け、シズは欠食児童タケちゃんへのイジメに抗議して組全体へ手紙をかき、健介は三輪車がほしいと夢中になって走りまわって自転車に衝突して瀬戸物屋の店先に転倒して四、五百円の損害を与え、純がそれを払う。その純のお金は直前に拾った三千円入りの封筒の中にあつたもので、そのた

め交番に届けるつもりが、できなくなる。(ここからあとが未刊中絶後追加された部分)家を出た純は相川君の家(母一人子一人でウドンの闇屋で辛うじて暮らしていたが、先日取り締まりでウドンを没収された母は悄気て氣力を失い、代りに相川君が学校をやめて闇屋になるというので、純ら級友が救援策を考えていた)に行き、中の様子をうかがって二千五百円の入った封筒を投げこんで家に帰る。翌日、母に全部打明け、母からどうすればよいかと問われて、落とした人にはあきらめてもらい、相川君には封筒入りの二千五百円はそのままとし、瀬戸物屋に払った五百円は袋張りで稼いで、今駅前で震災地への募金をしているのに寄付をすると答えると、母は「いい知恵だしたな、小坊主。」とほめてくれる。

両者を比較すると、「童話のある風景」に対して、「リンゴの袋」は全七章の章題が全てついていて整理されている。文章表現も同様で、推敲され、吟味されており、随所で適切な追加がなされている。それから、名前の変更があり、初出の「志津」↓「シズ」、「直樹」↓「健介」、「フミエ」↓「タケちゃん」となり、丁寧な、より適切に書かれている。

この作品の特徴は第一に、戦後の暗い世相を反映して、暗い素材が次々に並ぶダークサイド小説といってもよいであろう。タケノコ生活・迷信をかつぐ(あるいは新興宗教にすぎない)人々・袋貼りの内職・欠食児童とイジメ・落し物、忘れ物がでてこない風潮・闇屋の問題―というように作品ではめまぐるしく問題が登場し、しかもどれ一つとっても大きな問題で、そのうちの一つの問題だけで十分一つの作品のテーマになりうるわけで、それをこのように次から次へと事件の連続というふうに列挙、あるいは羅列してゆくというの

は、そこに作者の考えがはつきり出ていることを意味している筈である。

即ち、作者はこの作品では戦後の社会における問題を一つ一つをとりあげて、それをいかに解決するかポイントをおくのではなくて、どういう問題が、いかに山積しているのかを書きたかった、問題を解決するよりも、問題を提示する、提案するタイプの作品を書きたかったということであろうと思われる。

問題があれば当然解決されるのが望ましいが、しかし一千万人が餓死するだろうと予測されているように生存そのものが危機に瀕している敗戦後のような状況ではどう解決しようもない問題が山積しているのは当然で、そこから作家がその時点では問題解決型ではなく、問題提示型の作品を書くことがあっても許されよう。

第三にとりあげたいのは作者の問題解決の方法、しかたへの疑問である。

母は純にどう解決するのかと問うたのに対して純は、封筒入りのお金を落した人にはあきらめてもらって、二千五百円はあのまま相川君にやり、瀬戸物屋に払った弁償金の五百円は袋張り稼いで駅前の震災地への街頭募金に寄付する―と答えたのに対して「いい知恵だしたな、小坊主」とほめて終わるのだが賛同しがたい。

純の策は一見、現実的な策として支持を得られるかもしれない。しかも個人的に着服―私した者はいない。

しかし、落とし主は切り捨てられているところが問題である。これでは落とし主は助からない。その事で人生が一変したかもしれないのだから。

落し物を拾ったら交番に届ける。これがルールであり、人の道。

これに自分勝手な屁理屈をつけたり、人助けをしたり、自分のためにも使おうなどと考えること自体がまちがっている。何故かと言えば、そのお金は自分のお金ではない、他人のお金なのだから。封筒入りのお金は、今、純の手中にあり、従ってそれは自分の意のままになるものと思っているけれど、それは錯覚にすぎない。他人のお金を自分の弟の弁償金にまわしたり、友人の生活費に提供することが善となれば、ラスコーリニコフは無罪になってしまう。従って、純の落とし主にはあきらめてもらうというのは、根本的にまちがっている。ひとりよがりの、独善的な考え方なので、これはとれないことをはっきり指摘しておきたい。栄には間間こういうあやまりがあるので、その都度指摘しておきたい。

右文もの

栄の亡兄の孫右文が両親の相次ぐ死で孤児となり、母順子の遺言で栄が引きとったことについては既にふれたが、戦後の食糧事情の悪さから右文は無事育つかどうか懸念されたが、二度目の誕生前後から初めて歩き出す、と同時にしゃべり出す。丁度一斉に花を咲かす北海道のそれのように。足と言葉の長足の進歩に驚き、右文の父の卓を幼児の三年間育てたが、その笑い声、身のこなしが右文にそっくり伝わっており、まざまざと卓のよみがえりを実感するのが「北海道の花」(47・1「新女苑」)。「ヤッチャン」(47・2「赤とんぼ」)はおばさん(家主)のところにもらわれてきた三つになるヤッチャンがオシッコを教えずにたれ流すので始終叱られて尻を叩かれては泣いているので、十二歳になる康子はおばさんを鬼婆と思っていたが、世話を手伝い、話を聞いてみるとお尻のしつけを受ける時に母が病気で時期を失ったので今しつけ中だと知り、

おばさんの親切と愛情がわかるというもので、これは右文は登場しないが、境遇が同じ状況の子が登場するわけで、右文ものに触発された変形ヴァージョンといつてよい。

原点への回帰(一) 「浜辺の四季」(47・4・1「別冊文芸春秋」)も「初旅」(47・12・25「新文学」)も戦後の出発にあたって自分の出発点はどこなのか、原点はどこにあったのかを今一度慎重に見つめなおし、そこから再出発しようとする試みであったと見られる。そのことを何よりも明瞭に示しているのは「初旅」の初出末尾に付せられた「『道』のうち」の注記であろう。結局、その後『道』なる語を冠してまとめられる作品は書かれなかったけれども、両作共に、栄の出発の原点を見すえて書かれている点に注目されるのである。

「浜辺の四季」は全盛期の樽屋では母屋・隠居所・浜の家と三軒の家を持ち、十七、八人の大世帯で賑やかに暮らしていたが、得意先が次々に破産したところから浜の家だけが残り、たえず借金取りに責められて師範学校に進学していた長男の隼太は肩身の狭い思いをさせられる。ミネより上の姉達四人は次々と奉公に出、夜、米の一升買いがミネの仕事となるが、夜道の道祖神は怖く、やがて子守にやとわれて夕飯一食分家計を助け、将来は学校の「センセ」になると言つて子守仲間からは笑われる。

細部に濃密なりアリテイがあつて、丁寧仕上げた作品で佳作と言つてよいであろうが、いかんせん、これは「暦」の二番煎じであつて、どう発展しようもない所に問題があつたと言ふべきであろうか。高見順「文芸時評」(47・5・13〜15「東京新聞」)は「野心のなさ

(中略) 精力の浪費、否、生命の浪費がもつたいたなく思はれて仕方ない。」と評している。

「初旅」は父の操る小舟に乗って小豆島から高松までの二泊三日の、島の外へ足を印した初旅の思い出を書いたもので、中心は二つある。

一つは表題にあるように島の外に初めて足を印した初旅の印象であり、興奮である。高松市まで八里の父娘の旅なのであるが、外界の全てに対して感応するふるような触覚にとらえられた旅と高松市の印象が新鮮にとらえられている。もう一つは「辛いことだが、こちらにウェイトがあるのだが、高松師範学校を優秀な成績で出て母校で教えている長兄の隼太の縁談が降るほどありながら、片っ端から消えてゆくことで、嫁は未だにない。それはミネの父の樽屋が破産した上に、弟妹が多いからで、両親はそのことで貧乏は親の責任と考えて卑下し、肩身の狭い思いをしていた。

それだから、兄の下宿を楽しみに訪ねるが友達が今来ているから、晩に船の方へ出向くからとおい返された恰好になつて父娘はがっかりして折柄の祭の山車を追つて雑踏の中を歩く。すると父は息子が数人の同僚達と一緒に山車を見ているのをめざとく見つけるとミネに兄がこちらへ来るが「だまって、知らん顔しとれよ」と貧しい身なりを恥じて人ごみの中に身を隠してやりすすのである。この貧しさ故の辛い記憶も、今から三十年ほど昔のことなのだが、いまだに「いたわりつづけずにはいられない」として回想するのである。

そこには恐らく戦後の再出発にあたって、自らの原点を探る試みがなされているのであろう。

「履歴書」(47・12「サンデー毎日」)はおそらく義弟(栄の妹ス

エの夫、林政吉と推定される。スエと政吉の子が真澄である)の生涯を辿つたもので、小豆島に生まれてがむしゃらに生き、浜町河岸に立ち並ぶ倉庫の前に醸造元から直通の汽船が横づけされる醤油問屋の旦那として成功するが、しかしその内面の淋しさ、空しさ―四人の妻に死なれ、強制疎開で浜町から荻窪に移され、焼け残つた家に長男の嫁と五歳の孫と暮らす(長男と三男は未だ復員せず、二男は戦死)日々のむなしさに、生きながら立ち枯れたように過す多吉の心象を描く。

原点への回帰(二)

それから一般には殆ど知られてはいない

が、この年新聞に連載された小説に「遠い空」(47・4・22〜7・16「民報」日刊紙 全83回)がある。この小説は作者の病氣(「杜」[47・7・16付「民報」]によれば、肋膜炎の悪化により医師から執筆禁止を命じられる)により未完中絶となり、その後放置されたまま単行本として刊行されたり、全集等に収録されることもなかったために、その存在さえ(最も詳細な年譜でも年月不明とされてきたので、研究者にも殆ど知られていない作品である)未確認の状態であったが、私が東大新聞研究所で未整理の資料の中から発見、確認して、文泉堂版全集第三巻に初めて収録した。詳しくは後述するが、この小説は未完中絶とは言っても、日刊紙一回分約三枚として、八三分、計約二五〇枚の分量があり、内容的に見ても、ここで終わっても不自然、あるいは不都合ではないことを特に指摘しておきたい。

予告の「作者の言葉」(47・4・17「民報」)で「私は一人の女の歩いてきた道筋を描きたいと思う。その道々彼女は何を見、何を感じさせられたか。(中略)少女期から三人の子の母へと彼女の上に

くりひろげられた女の歴史を私のペンはどのようなふうにしとることができるか、暫くの間を私はこの一篇に精根をつくしたいと思う」と栄は述べているが、昭和の初めから敗戦後の二二年の春までの約二〇年間の女の歴史を、敗戦後の現実と対比させながら描く、言ってみれば重い主題の小説である。それが作者をして「暫くの間を私はこの一篇に精根をつくしたい」と言わせた所以であろう。

更に、この作品にはモデルがあり、栄の末妹貞枝がそうである。ヒロイン松子は十三歳で上京、姉香代の家から女学校に通い、その間に見聞する香代の夫、義郎たちのアナキストの生態に驚き、彼がコミニュストに転向するとテロを加えて腕を折る重傷を与え、後に夫となる正平と出会い、その子を生むが正平に経済力がないところから東京と小豆島に別れて別居を続けるが、二人目が生まれた頃、正平に女の影がちらつくのに気づいた香代の「夫婦は一緒に住むべし」との忠告に従って上京、香代から義郎の不倫騒動を聞かされて仰天すると同時に男女の機微についても知る。正平はのち旧制中学の教師になるが、校長から赤い教師として追放され、会社員となり、現在に至っている。戦後のインフレ生活の中、東京近郊の熊谷市に住んで三人の子をかかえてタケノコ生活を内職の袋貼りで辛うじて生きている姿を描くのであるが、このヒロインの姿、作品の骨格は全てそのまま末妹に重なり、事実香代・義郎は栄・繁治がモデルであり、その他神戸の安江姉、スポンサーの深川の兄の事跡も作中に忠実に採り入れられている。

とりわけ重要なのは、義郎の愛人事件でこれはそのまま事実としてあった。²⁷ 繁治と中野鈴子（中野重治の妹、詩人、作家同盟での同僚であり、親しい友人であった）との不倫事件で、発覚するや遊び

ではない、愛しあっているというのに対して、栄は頼に手の型がつくほどハリタオシて身を引かせた。いつ頃の事かと言えば、私の推定では、恋愛が始まったのは昭和一〇年半ば頃からで、発覚したのは約一年後。何故重要かと言えば、栄が文壇デビュー作となる「大根の葉」（掲載は悪条件が重なって遅れ、38・9「文芸」）を脱稿するのは昭和十二年二月初めのことで、この時点ではまだ作家以前であり、いくつかの習作を書き始めたばかりの、はつきり言えば凡庸な作家志望者にすぎないのであるが、それが突然、全く唐突に別人の作といつてよい作品が誕生するからである。

この、作品の質的な変化、目を見張るような、唐突でドラマティックな作者の変貌ぶりは、そこに以前の栄とは一線を画した或断絶があったことを想定しなければ到底理解することは不可能である。

そしてこの断絶・飛躍を促す契機となった事件こそ繁治と鈴子の裏切りであり、そこから栄はおのれの存立を賭けて作家への転身を企図し、全精魂を傾注した第一作が「大根の葉」となって結実したというのが私見の要点である。

言い換えれば、作家壺井栄誕生の背後には、巷間に流布する佐多稲子や宮本百合子の徳漣によってたまたま文学の世界に入ったというようなキレイゴトや偶然ではなく、夫に裏切られ、友人に欺かれ、過去一〇年余りに及ぶ家庭生活も理想も破壊され、四〇を目前にして、何のとりえもない、無能な病気持ちの女として弊履の如く捨てられようとした、血で血を洗う生き地獄からすさまじい作家への執念を燃やして這い上がった（何よりも雄弁にそのことを語っているのは「大根の葉」は脱稿までに八回書き直した「栄」これから）41・4「文庫」というその事実がこれを物語っているのである

うし、脱稿後の栄の顔を見た百合子がその顔つきの余りの疲労の深さに驚いて、折柄上林温泉に行くつもりであったが、急遽温泉へ行くのは栄の方だとチェンジして旅費・衣類一切を貸してくれたので、昭和十二年二月七日から一週間上林に行つてひたすら湯につかり、眠つて体力の回復に努めたという事実がある（37・2・5「百合子日記」、栄「柄にない話」41・4「文庫」という壮絶なドラマが隠されていたのだというふうに私は考えるが、詳細については前掲の拙稿を参照願うことにしてこの件は打ち切りをしたい。

従つて〈愛情の危機〉の問題は前掲の拙稿で論じた際に単に個々の家庭に生じた個人的なレベルの問題ではなしに強大な官権の弾圧による〈転向の季節〉の中での問題として考えてみた時に――佐多夫妻しかり、壺井夫妻しかり、中野重治夫妻しかり、そして正平と松子夫婦しかり（栄の末妹夫妻にもまた押し寄せては来たが、栄の機敏且つ果敢な処置によつて大事に至らず未然に防ぐことができたわけである）というように、時代の閉塞性の中に起きた現象と見る面も決して否定できないのであり、松子（貞枝）夫婦にもそれはあつたことを確認しておきたい。

テーマの設定からすれば、既述したように自らの再生、あるいは出発点を探り、発見しようとする試みであるから当然作品自体は重味や厚味を感じさせるものになる筈なのであるが、この場合はそうならないようである。

ヒロインの松子はいわば田舎からポツと出の、西も東もわからない女学生なのだから、当然あらゆるものに好奇心を持つ。

たとえば、義兄の義郎はアナキストと言ひ、働かず、時に「リヤ

ク」と称して会社から金をゆすり、やがてコミニュストに思想転換するとかつての仲間からのテロにあつて片腕を折られる重傷を負う。やがて弾圧が強化されると、拘留され、更に下獄の身となるが、それらの理由は一切語られない。

また、そういう中で後に夫となる正平とも知り合い、彼は拘留され、教員としては〈赤い教員〉として校長から追い出された経緯をもつにかかわらず、何らその経緯が冷静に客観的に突きつめられて描写されることがなく、単に言葉として言われるのみなのである。

つまり、作者の目論見としてはおそろく、末妹を主人公に戦前・戦後の二〇年間の歴史を、姉一家の反戦・平和の闘争と絡めてシリアスに描こうとするものであつたに違いない。

しかし実際に出来上がったものは似て非なるものと言わざるをえない。たとえばこの作品では義兄の義郎なる人物の思想が読者には不明であり、何をどう考えて行動しているのかが伝えられていない。だからその彼がアナキストからコミニュストに転換したとして襲撃され、負傷したと言われても、単に言葉だけの説明であるから内実は全く不明で、理解することもできないし、共感も拒絶されているのである。

言いかえれば、この作品では松子も香代もその夫である正平と義郎にその存在を支配・左右されているのであるから当然彼等について、何故そうなったのか、どういう考え方なのか、どうしてそれにかかわり、黙つて見過すことができないのか、彼女たちがそこから学んだものは何か等々の最も肝腎な問題が作品の中で一度も話題にされず、素通りされているという欠陥がこの小説にはある。

もしそれが書かれていれば義郎（繁治）はその運動の最も中心に

いた人物であるから、日本の社会主義運動、共産主義運動の生きた姿、生きた歴史が聞けた筈であるが、この作品ではそういう人から話を聞く、人と話し合う、人と議論する、そして理解するというパターンが夫と妻の間に存在しない。従って我々は松子や香代やその相手となる登場人物を通して社会運動についても、その内部分裂や、思想・方針の違い、将来の方向について何ら知らされることはなく、つんぼに敷かれたままなのである。最もひどいのは松子の夫正平で戦前も戦後も何をしたのか、何をしているのか、具体的には一切不明という呆れた事態がそこにある。

後述するが、のちに栄は自らをヒロインにして書いた連作小説『風』(56・8・5 筑摩書房)で自らの青春を描くが、男たちの主義や運動との関わりについては同様に全くふれていない。男たちの思想とは絶縁孤立なのだ。この点に壺井栄における〈思想〉の問題―プラスとマイナスという問題があると見られるが、その点については後に稿を改めてふれることにする。

一般にプロレタリア文学の欠陥の一つは当事者のみがそれにのめりこんで自らを絶対化し、それについてこない、あるいはわからぬものは切り捨ててしまおうといった独善主義にあると見られるが、ここでも全く同様の一面が露呈されているようにも見られないであろうか。

田舎からぼつと出た松子の疑問を義兄に次々にぶつけて行ったならば恐らく、これまでの作品とは違った新生面が開かれたかもしれない可能性があっただけに、その閉ざされてしまったことが残念でならない。

作品は病気で未完中絶となったが、既に指摘したように、問題が

投じられてもこの作品の性格上成り行き次第でそれが究明されるわけでも、解決されるわけでもないもので、これはこれで一区切りと考えてよいと思われる。

六

「妻の座」すでにふれたようにこの作品には前史とも言うべき二つの作品―「秋蒔きの種」(46・10「女性ライフ」と「渋谷道玄坂(A―小説)」(47・5「東北文学」)がある。

「秋蒔きの種」については本稿の「四」で既述したように、作家のミネが小豆島の故郷で小学校の教師をしながら先祖のまつりをするうちに婚期を逸してしまった妹の閑子を上京させ、二十年來のつきあいの作家の後妻にどうかと縁談をすすめるまでの話であったが、「渋谷道玄坂」はその話がまとまって結婚式も済み、半月程たった或一日、ミネと閑子と末妹の千枝の三姉妹が二十年ぶりに空襲で焼野原になった渋谷の道玄坂界隈を歩いてあまりの変貌ぶりに驚き、往時を回想する。そしてその日一日、ミネは新婚の閑子の様子に何とはわからないが不安と危惧を持ち続けるといふもので、それが結婚当初からであったことが判明する。この作品の発表時点では結婚は既に半年以上前に破局を迎えていて、破綻は既定の事実であったのだが、作品では未定の事柄として扱われている。

なお、同一素材を扱ったものに「宿根草」(48・1「婦人」全集3)があり、こちらのヒロインきく子は破談ののち、郷里に帰って新制中学の教師として再出発するというふうにはハッピーエンドになっ

ところで、「妻の座」についての批評は数多くあり、論点多岐にわたっているので、以下に主要な問題点にしぼって整理をしながら私見を述べておきたい。

野村の結婚

敗戦直前の六月に、二十一年間連れ添った妻に先の間違ひ 立たれ、あとに二十歳を頭に四人の子供を残された作家の野村は戦前戦後の配給制で何を買うにも並ばねばならぬ事にネをあげる。配給の行列に並ばなければ衣食に困窮し、さりとて並んでいたのでは原稿が書けないというディレンマに陥っていたからである。

また、娘たちが「せがむ」ので一周忌が過ぎたら子供たちのために「お針のできるやさしい人」と結婚したので世話してほしいとミネに斡旋を依頼してきたところからミネの妹の閑子との結婚ができたのであるが、まずこの結婚についての考え方そのものが間違っていたといわなければならぬであろう。

というのは、古谷綱武²⁹が言うように「野村がもつめたものは、自分の妻ではなくて、子供たちの第二の母」なのであり、「実際に野村がもつめていたものは、第二の母という地位にすえた無給の家政婦である。そしてその必要をみたすことのできる女に、自分の妻としての役目をも、もつめようとしたのが野村の結婚」であったからである。

つまり、ここでの野村に必要なのは第一に家政婦であり、次に第二の母であつて、再婚の理由の中には信じられないことだが、夫が妻を必要としている理由が全くないのであつて、その結婚観の異常なことは明白である。

無論、これに對しては当時の五十歳を過ぎた男やもめには、再婚相手への条件をつけるなどは気恥ずかしくできないものではない、というような反論もあることは承知しているが、ならばお氣に入りの相手が現われるまで待つべきなのであつて、おのれを偽つて妥協すべきではない筈である。

また、家政婦―配給をとり、炊事・洗濯・掃除等の家事を担当する女性が必要であれば、その労働に対する報酬を支払う家政婦を雇えばすむことである。

「第二の母」、これが最もおかしい。男のいない家に、子供たちの母親になりに行く女がどこの世界にあるか考えてみればよい。

以上の検討から明らかのように、野村は自らの妻となるべき女性についての認識が明確でない以上、結婚する資格のない、相手や周囲に迷惑をかける故に結婚してはいけない人間であつたということになる。

従つて結婚後に「せんの女房は九文の足袋をはく女でした。私の腕の中にはいつてしまふ女でした。」(「二」)と閑子と比較して愛惜するなどの事は結婚前に一度も会つたことがないならいざ知らず、閑子の許に足繁く通つて彼女の「結婚は秋までのばしたい」(「一」)というたつた一つの希望条件も「男の側のせつかちな申出にまけて、八月の暑熱の中式は挙げられた」(同前)以上論外であり、言語道断といわねばならない。

ミネの

同様に野村が子供のために再婚するなど見栄を
あやまち はつた偽りのお体裁を言つてあやまちをおかしたように、ミネの側にも関根弘³⁰が言うように「われ鍋にとじ蓋という庶

民の論理」をもち出して、妻のない男と夫のない女とを組み合わせようとしたところに女の涙をみちびく原因もあつたのだ。あるいは平野謙流に「徳永直のほうから嫁さがしをたのまれてそれを引受けた。ところが、ちようど自分に妹がいる。それを徳永直のところへやったらどうだということになって、嫁さがしが婿えらびにすり変わってしまったわけです。終始一貫して婿えらびで周囲の人たちが押していったのです。それに徳永君自身も押されてしまった。」と言つてもよい。

いずれにしてもミネは、高名で進歩的な作家野村の後妻に自分の妹の閑子をと一旦思いつくやのぼせあがり、そのあまりの唐突さ、その不自然さ、不似合いさなどは消し飛んで、仲人役を頼んでいた貞子（佐多稲子であろう）が野村に閑子との縁談を躊躇してまだ話さずにいるうちに、ミネが野村と会うやいきなりその話を持ち出すという、なりふりかまわぬあせりや舞い上がりぶりは常軌を逸しているというほかない。

しかもミネはこの、妹を高名で進歩的な作家の後妻にという考えを「妻の座」では隠している。しかし、それを隠しているかぎり、閑子の悲劇の根本原因はいまいにされ、はぐらかされた地点から出発しなければならなかつたのである。

「妻の座」の評価

以上、この作品の否定的な面ばかりを指摘してきたが、それではこれは全くダメな作品かと言えばそんなことはない。今日の歴史的状況から見ても、次のようなくつかの点での先進性は評価されるべきであろうし、またその文学作品としての達成度も評価されるべきものと思う。

まず、作品のタイトルとなつていて、この作品発表後に流行語となり、やがて普通名詞として一般に広く使われることとなつた「妻の座」という言葉はこの作品に基くものであつて、新しい戦後の民主主義時代に社会の最小単位としての家族の中に夫と並んで妻の存在の主張と認知を求めた先進性は極めて大きいものとして評価されねばならないであろう。

それと同じく「二」章の中でミネが「女の立場からミネは千恵子（引用者注—モデルは宮本百合子）の創作に現われる女について考え」る場面があり、そこでミネが「些細な不審」をもつこととして「獄中にいたときの高木との手紙の往復に、千恵子の方だけが呼び捨てにされていることである。このごろ雑誌などに発表される高木との往復書簡には、一つとして宛名の千恵子に様がついていない。それはしきたりを無視した現れかもしれないが、みていて自然ではなく、男の方だけが嵩張っている感じだった。それだけではなく、自伝的な作品を通して感じられる千恵子には、古い日本の女のようにかしずいているような感じを時々もたせることがある。」と鋭く指摘しているように、古風で、伝統的な男尊女卑の考え方批判も同根のものである。

また、みめ美しく生まれない女の悲しみ、実用一点張り、働いてさえいれればいつか認めてもらえると働くだけの女の不幸、出戻り女のががき、「夜叉」の如く恥も外聞もなく破天荒に狂奔する閑子の姿を描く作者の筆は微塵も甘さや弁護はなく、というよりもむしろ残酷なまでに、容赦なく醜態をさらけ出し、圧倒的なリアリティをもって描き出しているところにこの作品の文学的達成は認められるのである。

従って平野謙³²のようにこれを「デマゴーギッシュな小説」とする見解もあるが、これは採らない。

のち、栄は徳永直をモデルにして「岸うつ波」(53・5―12「婦人公論」)を書き、徳永はそれに対して「草いきれ」(56・8、9「新潮」)を発表するがそれについては「岸うつ波」の項でふれることにする。

(この章未完)

注 本稿では西暦の最初の二桁(19・20)を省略している

- 1 川崎賢子「GHQ占領期の出版と文学―田村泰次郎『春婦伝』の周辺」(06・3・1「昭和文学研究52集」)。
- 2 アドレスは次の通り。<http://prangedb.kix.jp/>
- 3 拙稿「壺井栄論(16)―第六章 戦時下の文学(2)―」(06・10・20「都留文科大学研究紀要64集」)。
- 4 正確には次の発言が一度ある。「たしかまだ進駐軍の検閲があったと思う。そのわく内で書かねばならないから、なんとなくきゅうくつなものも感じながら、わたしなりの戦争への批判も書いたつもりである」と、「モデル」ということ(壺井栄名作集5『母のない子と子のない母と』65・10・30ポプラ社所収「あとかぎ」)に死の直前にちらと一度記しただけで、何故か沈黙している。
- 5 中野彩子「原爆記述 GHQ削除―被爆を初めて取り上げた壺

井栄『石臼の歌』(01・9・1「毎日新聞大阪本社版」一面トップ記事)。

6 谷暎子「占領下の児童書検閲―壺井栄の『石臼の歌』―」(03・10・15「児童文学研究36号」)。

7 中川正美(朝日新聞大阪本社編集委員)からの02年8月8日付時点での同社の調査結果の教示による。及び次の稿参照。同氏「井伏、壺井：未公開作続々―米大学に保管 占領下の雑誌」(02・8・19「朝日新聞夕刊18面6段」)。

8 昭20・9・14付宮本百合子書簡。

9 栄「わが家の戦後十年」(55・8・15「朝日新聞」)。

10 栄「地下足袋」(46・2「民衆の旗」)。

11 栄「縁起」(46・8「小天地」)。

12 初出原題は「海辺うみべの村の子供こどもたち」。文泉堂版新全集9収録。のち、全面的に改稿改題して『母のない子と子のない母と』

(51・11・10 光文社)になる。同上全集10収録。

13 栄「あてがい扶持」(46・1「月刊読売」 同上全集11)。

14 栄「モデル」ということ(あとかぎ)(65・10・30 壺井栄名作集5 ポプラ社)。

15 注14に同じ。

16 拙稿「壺井栄―改作の問題をめぐって―」(96・4「解釈と鑑賞」)同「壺井栄論(16)―第六章 戦時下の文学(2)―」(06・

10・20「都留文科大学研究紀要64集」)。

17 栄「昔の顔」(46・4「民衆の旗」)。

18 栄「今昔」(46・6「今昔」)。

19 栄「縁起」(46・8「小天地」)。

- 20 栄「花嫁の箸挟」(46・9「令女界」)。
- 21 小田切秀雄「解説」(68・12・11『壺井栄全集8』筑摩書房)。
- 22 佐藤清一「壺井栄先生と伊東」(『壺井栄全集3 月報3』68・6・10 筑摩書房)。なお、斉藤先生の本名は安藤くに子。
- 23 文泉堂版全集刊行後、福岡勝氏からの御教示による。記して御礼申上げる。
- 24 表題は次のように三転している。「白い贈物」(初出) ↓ 「アメリカの塩」(『あんずの花の咲くころ』48・4・15 小峰書店) ↓ 「白いおくりもの」(『壺井栄児童文学全集2』64・10・15 講談社他)。
- 25 現在では「民報」の復刻版(民報社 民報 東京民報)が法政大学出版局(91・6・24)から刊行されているので容易に初出紙を手にすることができる。
- 26 ここで言うモデルについて誤解のないように一言しておきたい。ここでモデルと言っているのは、その人物や事件の根本的な設定において同じであると言っているもので、何から何まで登場人物とモデルが同じであるということではない。松子の東京遊学にしても姉の元子と二人で一緒に香代(栄)の家からトキワ松学園(現在の校名)と戸板裁縫学校にそれぞれ通学したので、松子一人で来たわけではない。また、姉の安江にしても商人ではあったが八百屋ではなくクリーニング屋であり、深川の兄にしても同様に酒屋ではなく醬油屋であるというように細部にフィクションがあることは言うまでもない。
- 27 拙稿「隠された真実―壺井栄における作家転身の意味」(94・2・15「言語と文芸」110号 おうふう刊)、同上「壺井栄論」
- (13)―第四章 文壇登場―(04・10・20「都留文科大学研究紀要60集」)で詳しく述べたのでここでは簡略に述べた。
- 28 「渋谷道玄坂(A―小説)」としたのは同題の随筆があるからで、こちらは「渋谷道玄坂(B―随筆)」(51・11「婦人公論」として区別した。ただし、2―3頁ほどの戦前と戦後の渋谷の今昔を述べた小品で全集には収録しなかったため、混乱のおそれはない。故に以後は「A―小説」を省略したことをおことわりしておきたい。
- 29 古谷綱武「文学に描かれた―生活―壺井栄の『妻の座』の閑子」(53・6「文芸広場」)。
- 30 関根弘「壺井栄小論―探偵の事務所から」(52・9「新日本文学」)。
- 31 平野謙・荒正人・平田次三郎・杉森久英「座談会 女流作家を語る」(48・5「女性改造」)。
- 32 平野謙・中島健蔵・安部公房「創作合評」(56・10「群像」)。